る」という意味をもっている。あたかも春をよびさますかのように、他の花にさきがけて咲くからであった。あめんどうは、一月末から二月上旬にピンクの花をつけ、四月には、ひらたい実がなり、これがアーモンドといわれている。

　寒梅をみた新島のおもいは、あめんどうをみたエレミヤのおもいに通ずるものがあった。彼は困難のさなかに、生命が彼と共に働き、やがて来る春のおとずれを予兆していることをうけいれたにちがいない。寒梅はやがて来る春のきざしであった。

　わたしたちは、寒梅をことさら愛した新島のこころをしのぶと共に、寒梅のふるさとである同志社のためにともに祈りたいとおもう。

（大学神学部教授）

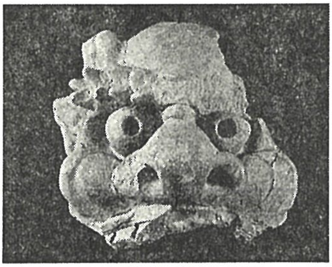
※本稿は一九八六年一一月二三日・同志社創立一一一年記念礼拝説教を原稿に書き直したものである。

---

**同志社校地出土の埋蔵文化財 (11)**

## 相国寺（しょうこくじ）の鬼瓦（おにがわら）

鈴木　重治



室町時代　現存高 27cm
1976年8月　同志社中学校体育館地点（相国寺址）出土

　京都市内の発掘調査でも、出土した遺物や遺構の年代の検討に、しばしば手懸りを与えてくれるのが火災によって形成された焼土層である。とりわけ、年代の明らかな火災時の焼土の堆積は、層位を重視する考古学では相対的な年代の前後関係を決める上での鍵層として評価する。つまり、遺物などの年代決定に当っては、形式や製作技術上の特徴に加え、出土層位が物を言うことになり、年代上の基準資料の確認をみることになる。

　ここに示す鬼瓦も、室町時代の前半に年代の与えられる基準資料である。

　同志社中学校の体育館建築に先立つ発掘調査では、上層の江戸時代の焼土層と、下層の室町時代の焼土層とでは、包含された遺物群の違いも明瞭であった。この鬼瓦を出土した廃棄土坑からは、大量の瓦が出土しており、応仁の乱の際に焼け落ちた相国寺の伽藍の一部に使用されていたものと考えられた。つまり、製作年代の下限が与えられた基準資料ということになる。

　この鬼瓦の製作上の特徴をみると、まず指摘されるのが彫りの深い造作と、均整のとれた各部分の力強い造形である。また、剝離部や裏面に残る製作過程でのナデやヘラケズリは、きわめて粗い。形態的には、大きく突出した眼球、小鼻を左右に張り出した雄大な鼻、肉付き良く二段に波打つ頬、二列に逆立つ角錐状の眉毛など、それぞれにバランスよく配置されている。

（同志社大学校地学術調査委員会　調査主任）